

# 「企業戦略と内部統制」をテーマに ビジネススクール開設記念シンポジウム開く

来春の「中央大学ビジネススクール（大学院戦略経営研究科）」開設を記念するシンポジウムが12月1日、来年度以降教壇に立つ教員をパネリストに招き、駿河台記念館で開催された。

来春の「中央大学ビジネススクール（大学院戦略経営研究科）」開設を記念するシンポジウムが12月1日、来年度以降教壇に立つ教員をパネリストに招き、駿河台記念館で開催された。

熱心に聞き入った。



## パネルディスカッション

挨拶、小口好昭副学長の開会の辞でシンポジウムが開会。藤沼重起氏（東京証券取引所グループ取締役及び自主規制法人理事、前日本公認会計士協会会長）が「強固な内部統制の構築と運用」と題して、また総合政策学部の丹沢安

治教授（ビジネススクール開設準備室副室長）が「内部統制導入とそれ以後の企業戦略」というテーマでそれぞれ基調講演した。昼食をはさんで午後は、中央大学大学院法務研究科の野村修也教授が法律家の立場から、内部統制の罰則領域をはっきり定めることの必要性を主張。また武蔵大学経済学部の久保田敬一教授が専門のファイナンス理論の立場か



熱心に聞き入る参加者

クール開設準備室の杉浦彦副室長の司会で、パネルディスカッションに移り、丹沢教授は「内部統制が企業にメリットをもたらさか

ら、日本企業がアメリカ型の利益至上主義になり日本の得意分野であるものづくりやサービスが疎かになることに警鐘を鳴らした。

この後は、ビジネススクールの開設準備室の杉浦彦副室長の司会で、パネルディスカッションに移り、丹沢教授は「内部統制が企業にメリットをもたらさかどうかは、すぐには分からない」と指摘。また藤沼氏は、コスト面について「内部統制にかかる費用を気にするのはネガティブな考え方であり、経営者自身が戦略として内部統制を捉えることが重要である」と主張。また野村教授は「内部統制報告書に虚偽記載があれば罰則が適用される。最低限やることは分析しておく必要がある」と強調した。

質疑応答では、参加者からの「内部統制はどこまでやるべきか」というに質問に対し、藤沼氏は「最初から完璧なものを求めず、できることからやっていけばよい。コストはかかると思うが、結局は企業リスクを少なくする」などと答えた。約4時間半に及んだシンポジウムは、ビジネススクール開設準備室の高橋宏幸室長の閉会の辞で幕を閉じた。

部2年

（学生記者 駒田恵二法学



# キャスター講演に「出会い」の大切さ知る 学生記者がフジテレビ放送施設を取材

「Hakumon ちゅうおう」の学生記者が10月26日、東京・台場のフジテレビジョンを訪ね、スタジオオ

や報道センターなど目にするのできない放

送施設を取材した。

この日は取材体験の一環として実施したもので、学生記者9人が参加。緊張しながらフジテレビに乗り込むと、まず送出センターと

副調整室を案内された。

送出センターには、放送されるすべての映像や音声が集められる。「ここはテレビ局の心臓部なんですよ」と説明されると、その重みに学生記者たちの表情も

「とくダネ！」のスタジオで

副調整室を案内された。送出センターには、放送されるすべての映像や音声が集められる。「ここはテレビ局の心臓部なんですよ」と説明されると、その重みに学生記者たちの表情も

副調整室を案内された。送出センターには、放送されるすべての映像や音声が集められる。「ここはテレビ局の心臓部なんですよ」と説明されると、その重みに学生記者たちの表情も

備作業に追われていた。一通り放送施設の取材を終えたあとは、会議室で箕輪幸人解説委員の講演を聞いた。長年報道の現場で活躍し、現在は深夜の報道番組「ニュースJAPAN」のキャスターを務める箕輪さんは、ニュースを発掘する報道記者の日々の仕事の厳しさや、人の信頼を得るためには粘り強い努力が必要なことについて話してくれた。

警視庁詰め時代、新聞記者ばかり可愛がっていた警察官に信用されるため、箕輪さんは連日連夜、夜回りに朝回りを繰り返した。警察幹部が通う飲み屋に張り込み、運よく接近するチャンスを得た時の喜び。地道な努力を積み重ねて、ようやく10のうちの1を教えるもらえたというのに、それに気付かない自分の未熟さ。具体的な話には記者という職業の厳しさが伝わって

る。箕輪さんは、それでも報道記者を続けられる理由を「スクープは一度とるとゾクゾクしてやめられないんだよね」。

そして、箕輪さんが学生記者に何度も強調したのが「人との出会い」だ。「この仕事をしていると、いろんな人に会える。平凡でも、キラリとしたものを持った人に出会えたときに、自分の生きかたを見直すことができる。君たち学生記者も同じだよ。」電話一本で話を聞ける人が何人いるか、がマスクミで働く人間にとって重要なんだよ。

小さな出会いも大切に、自分をごまかずに相手と向き合う。箕輪さんから教わったことが心に残った。今日から実行しよう、と誓った。

(学生記者 山崎綾香 11法 学部3年)

# 「サークルネット」が運営開始1周年 学友会の約60部会が利用

学友会の「サークルネット」が、10月に運営開始1周年を迎えた。

サークルネットとは、4号館とCスクエアで利用できるインターネット環境のこと。2000年にCスク

エアの建設が決定された際、学友会の度重なる連盟会議を経て実現した。

年1回5月に予定されている講習会に参加すれば、サークル棟とCスクエアに部屋を持つ公認部会は、

ネットを利用した活動を視野に入れることができる。

中大に約130存在する学友会公認部会（サークル）の代表には、ぜひ知ってほしいシステムだ。

インターネット運営委員会の今年度委員長の本間和基さん（商学部3年）によると、現在は約60部会がサークルネットを利用して「使うかわからない。」「使わなければならないが、あれば便利です。参加する団体には、講習会を受けてもらう必要があります。とはいっても、堅苦しい感じの内容ではないですから気軽に来ていただきたくらと思いま

本間和基さん

す」と本間さん。

活動の輪を広げていくのと同時に秩序をもって運営を進めていくためには、ルール遵守が基本。質問はメールで随時受け付けてい

## 懐かしの駿河台キャンパスが蘇る

### インタラクティブアート『光と記憶のジオラマ』

10月28日に多摩キャンパスで開催されたホームカミングデーのイベントのひとつとして『駿河台の記憶』と題し、インタラクティブ

アーティスト松尾高弘氏の製作によるインタラクティブアート『光と記憶のジオラマ』と駿河台キャンパスのコレクションの展示が図

る。アナログでのアンケートや直接のコンタクトなど、ネット委のアプローチも真剣だ。

本間さんは、「論文の検索だったり、展示会情報の広告だったり、ネットの使い道はいくらでもある。些細な存在ではあるが、少しでも各団体の活動の助けになればいいですね」と話す。そこには、学生生活の補助

書館1階ホールで催された。今回の展示のコンセプトは「見る展示」から「対話する展示」ということで、ホールの中央に設置されている駿河台キャンパスのジオラマに手をかざすと、当時の教室や講堂の様子画像が大きな白いスクリーンに浮かび上がり、校歌を歌

う歌声や学生の声などの音が流れる仕組みになっている。

的な存在となりたい、との思いがある。「不備はあります。今は新しい仕組みを管理する体制を充実させているところ。何年か後にはしっかりとしたいものづくり上げていきたい」と本間さんは、サークルネットの充実を期している。

（学生記者 竹下奈穂 〓 済学部3年）

観覧に訪れた卒業生らは、「俺はここで授業を受けたんだよ。懐かしいなあ」と目を輝かせながら当時の様子を熱心に語ったり、「狭いとは思っていたけど、本当に狭かったんだなあ」と





## 応援に行って中大スポーツを盛り上げよう!

### 「第1回中央大学スポーツシンポジウム」開く

「なぜ中大生は観戦に行かないのか!?」中大スポーツを盛り上げるには」のテーマで、「第1回中央大学スポーツシンポジウム」(主催・FLPスポーツ・健康科学プログラム、企画・運営・河田ゼミA)が11月27日、クレセントホールで開かれた。

パネリストとして陸上競技部・駅伝ブロック所属の関敏則さん(法学部4年)、読売テレビアナウンサーの清水健さん(アメフト部OB)、スポーツキャスターの田中雅美さん(水泳部OG)、共同通信社運動部の中西利夫さんが出席。吉村豊・理工学部教授(前水泳部監督)の司会でパネルディスカッションが行われ

た。講演で関さんは、中大スポーツの課題について①施設の整備②宣伝・広報③指導者やスタッフの3点を充実させることの必要性を指摘した。

南平寮では、8畳部屋に3〜4人が共同で暮らし、プライバシー保護はカーテン1枚、狭いので立ったまま入浴しなくてはならない風呂などの現状を訴え、各部単独の寮をつくるべきだと提案した。

宣伝・広報については、選手の応援広報が整備されていないことを指摘。指導者やスタッフの充実については、指導にあたる大学職員には「優遇策で対応すべきだ」と提案した。

清水健さんは「アメフト部での経験と中大と関西の違い」について講演。「僕が選手だった頃、観客は最大でも

2000〜3000人だった。しかし関学―立命のトップ同士の争いで、勝てば関西の頂点に立つという試合のとき、25000人の観客を動員した」と、関東と関西のアメフト人気の違いを紹介した。

また、「中大スポーツを盛り上げるために強化すべき項目は？」というアンケートで、選手たちが「実績・強さ」を5番目に挙げていたことについて、「もっと選手本人たちが自覚を持って戦わなければ、一般学生はついてこないのではないかと。強くないと魅力がない」と強調した。

当時を感慨深く振り返った。関さんは、駿河台校舎正門の「中央大学」のプレートや戦前戦後、駿河台校舎で使用されていた机や椅子などの貴重な資料が展示された。

今では無くなってしまった駿河台キャンパス。一日限りではあったが、卒業生の心の中には当時の様子や風景が蘇っていた。

(学生記者 上田雄太 工学部2年)

た。講演で関さんは、中大スポーツの課題について①施設の整備②宣伝・広報③指導者やスタッフの3点を充実させることの必要性を指摘した。

清水健さんは「アメフト部での経験と中大と関西の違い」について講演。「僕が選手だった頃、観客は最大でも



スポーツシンポジウムのパネリスト

3度のオリンピック出場経験を持つ田中雅美

さんは、2000年のシドニーオリンピック400mメドレーリレーで、自分の調子が悪く、みんなの足を引っ張らないかと不安に感じていたとき、周りが「絶対に（メダルは）取れるから」と背中を押してくれたおかげで銅メダルをとれた話を紹介。

「1人では成し得ないことが、仲間の協力によって

実現できることを身をもって感じた」と述べ、スポーツのすばらしさを強調。そのうえで、「輝きを選手たちと共に感じてほしい。選手たちの泳ぎを目で見て、自分たちが中大生なのだという誇りを持つてほしい」と、一般学生にもっと応援に行くように求めた。

中西さんの講演のあとは、来場者の質問にバネリ

ストが答えるパネルディスカッションに移り、熱心な質疑応答を行った。最後にスペシャルゲストの大久保信行・陸上部部長が「地域の方のスポーツ大会を開催したい。大学は地域に貢献するべきものだと考えている」などと述べて、シンポジウムを締めくくった。

（学生記者 池田園子 法学部3年）

## みんなで総合政策学部について考えよう

### 新旧学部長が対談 初の「緑化祭」開催

総合政策学部についてみんなで一緒に考えてみよう——という催し「緑化祭」

（代表・守屋優さん 総合政策学部3年）

が11月26、30の両日開かれた。

「政策と文化の融合」という理念のもとに総合政策学部が開設されたのは、1993年で、今年で15年目

を迎える。今回は総政をより活性化させるため、学生が主体となって初めて開催した。

26日に開かれた第1部「総発祭」では、6団体の学部学生が自ら学び、活動していることについて講演。

30日の第2部「総論祭」では、学生に教職員も含めた

グループディスカッションと、これからの総政について横山彰教授と大橋正和教授による新旧学部長の対談が行われた。

大橋教授は「学部をつくるときに一番楽しくて大変でした」と創部当時を振り返るとともに、「先生の負担が大きく、学部長も2

期務めたのは渥美東洋さん（1代目学部長）と私だけです」と紹介した。横山教授は「私たちひとりひとりが、こやしになってみなさんが伸びる、そういう学部です」と語った。

「政策と文化の融合」という学部の理念に関して、大橋教授は「世の中の変化は想像を絶するものがある。そのような変わり目は、またとないチャンスで、またとない幸せなことと指摘し、

「今までの学問を否定するわけではないけれども、新しく勉強しなければいけないことがたくさんある」と強調した。

横山教授は「人それぞれ、『政策と文化の融合』という捉え方は違うと思うが、私は、文化のないところに政策はないと考えています」としたうえで、「まず価値、文化、歴史そういうものを学ばないと政策には携われない」との考えを

示した。

最後に、総合政策学部の学生に期待することについて、大橋教授は「リーダーになるには、いろいろな人のいろいろなことを理解しなくてはいけない。また、状況を的確に把握して、将来の方向性を捉えていくことが必要です。だから、この学部で、いろいろな科目、いろんなことをやっている意味がある」と語り、社会のリーダーになるよう期待を込めた。

また横山教授は「一番期待するものは、内部に入っていて、その当事者になること。アドバイザーや批評家といった部外者的なものではなく、社会の一員として、当事者になって、その社会を変えていける人になって欲しい」と学部学生にエールを送った。

（学生記者 武田朋実 法学部2年）